
愛を誓って？(2000文字)

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を誓って？（2000文字）

【コード】

N3817K

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

どれだけ短くできるのかという挑戦。『愛を誓って？』を2000文字で修正してみました。

バレンタインデーの日、手作りチョコを差し出しながら彼女は、お返しスゴく期待してるつと目をキラキラさせた。バレンタインデーのお返しは三倍返しとよくいわれる。女性の特権、世の通説である。はあ。

そんな経緯で、僕は初めてリングというものを買った。

女性達の憧れてのアイテムだ。普通に渡すのは味気ないような気がして、僕はリングをケーキの中に隠すこととした。駅ビルのケーキ屋で購入したワンホールだ。

「あれっこれどうしたの？」

トイレから戻ってきた彼女が、先程まで食卓にはなかったものに目を点とさせた。

「たまにはね」

包丁を握り、僕は切り分けた。リングの位置は把握している。生クリームの外壁、デコレートが若干異なる部分だ。そこから埋め込んだ。必ず彼女がリングを口にするよう切ると、皿によそう。

「はい、どうぞ」

嬉しそうに、彼女はケーキにフォークを差し込む。先端を切り分けて、まずは一口。

「うん……」

彼女は静かに頷くと、再びフォークを伸ばす。食が進むにつれ、フォークがケーキの中に収められた銀の輪に近づき、やがてその硬さに驚くことだろう。

これは何？ まあ素敵！ とな。デヘへ。

さあ、一口、三口、何口、……と。

「あれ？」

「ん？」

気づけば、彼女の皿が何故だか綺麗になっていた。理解が出来ず、

一瞬我を忘れる。

「どうしたの？」

「いや……、おかわりする？」

「するー」

僕は予想外の事態にやや冷静さを失いながらも、ケーキに再び刃を入れた。もしかしたら、リングを潜ませた位置がずれていたのかもしれない。リングの位置を予測して、僕は彼女の皿に切り分けたケーキに乗せた。彼女は変わらず黙々と、フォークでケーキを串刺しにすると、一口二口、何でかな、ペロりとたいあげやがりましたよ何でかな、本当に何でかな。

「どうしたの？ 何だか顔色悪いよ？」

「別に……」

平静を装いながら、震える手で僕は、やや半月様のケーキと対峙する。

どういこと。

しばし狼狽したが、すぐに良いアイディアが浮かんだ。

こうなりや彼女が口にしくとも良いのだ。僕が食し、ケーキからリングを救助し、食べ終わってから彼女の手をとり、リングを指にはめてあげればいい。

「よし、それでいく」

「なにが？」

「別に……」

曖昧な笑みを作り、僕も味わい始めた。目の前が白くなり動悸が激しく変な汗をかいている時のケーキは味がしないのだと初めて知りつつ、がつつく。一切れ、また一切れと。

「「ごちそうさまでした」」

あつという間に完食、僕と彼女は手を合わせ見つめあった。

「やっぱ顔色悪いよ」

彼女が不審そうに小首を傾げる。そりゃあそうだ。僕の心拍は今、ネズミより早い。

あまりの現実に打ちのめされながら、起こっている事態を脳内で整理した。

ケーキには確かにリングがあつた。彼女が食べたら気づく予定だった。だが気づかなかつた。仕方なく僕も食べた。よく噛んで食べた。リング逃すまいと食べた。しかし無かつた。

……認めたくないが、認めざるえないだろう。この場合解決策があるとするれば……。

「ねえ早紀ちゃん」

「何？」

「スカトロつて、」

「いや」

彼女は瞬時に釘を刺した。雰囲気壊すなつて意味ですね。電光石火、早すぎて惚れ惚れする。トホホ。

さてどうしたものか。

「……うっ！」

考えめぐねていると突然、彼女が床に転げ落ちた。

「さささ早紀ちゃん!？」

倒れ込んだ彼女に、慌てて近づく。腹を押さえ、丸まる彼女の顔は、苦悶の色に染まり、歪んでいる。

「お腹……痛いつ！」

まさか、と全身が凍りつく。僕が隠したリング、それを完全に飲み込んでいて、それが腹の中で悪さをしているのか。なんてこつた、なんてこつたい!

「ごめん早紀ちゃん！」

僕は苦しむ彼女にすがりついた。

「早紀ちゃんを驚かせたくてリング、バレンタインデーのお返しっ、ケーキに入れたからソレ食べちゃったんだよ! 本当にごめんっ!」
彼女は目を大きく開けると、ううと脱力する。

「償つて……」

痛みに喘ぎながら彼女が訴える。

「必ず償う！ 許して！」

僕の謝罪に、虚ろな表情。痛みが極限に達しているのか。このままでは危ない。

高速で考え、僕は閃いた。

「救急車！」

「待つ……………」

飛び上がるうとして裾を捕まれ床に体をぶつける。見やると、彼女が瞳を潤ませていた。

「キスして……………」

こんな時に何をいつてるんだ、とはとてもじゃないが言えなかった。瀕死の願いをはね除けることなど出来ない。

僕は目を閉じ、僕の唇を静かに重ねた。

ゴリツ。

唇と異なる硬さに、パツと離れた。そして啞然とした。

彼女がニヤリと笑う。艶やかな唇に銀が輝く。待ち望んだ瞬き。あまりのことに、僕はその場に脱力した。

そんな僕を彼女覗き込むと、唇からリングを取り出した。

「噛んで、痛かった。お返し」

リングで僕のおでこを弾くと、彼女は僕のお腹に頭をのせ、リングを指にはめた。

「ありがとう、大好き」

「……………うん。僕も」

天へとかざされたリングは、ライトに照らされ美しさを増した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3817k/>

愛を誓って？(2000文字)

2011年1月27日06時16分発行